

---

# 過ちのライゼ

小鳥遊奈鳥。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

過ちのライゼ

### 【Nコード】

N9673Y

### 【作者名】

小鳥遊奈鳥。

### 【あらすじ】

十三年前のある日、突如世界を闇で覆った日 通称、黒昼の日。その日を境に世界では能力に目覚める人間が出てきた。しかし、人智を超えた能力を持ったがために忌避されたり差別されたりする能力者たち。そうならないように能力を万人のために生かす神雑学園能力運用部の面々。四月も半ばの頃、一人の男子生徒が神雑学園に転入してきたことで物語は動き始める。学生らしい日常や能力者としての葛藤を描いた能力者系学園モノ。

## プロローグ（前書き）

来年、どこかの出版社に応募しようと思っ  
て書き温めていた“過ちのライゼ”ですが、まア現実的に考  
えて無理だよ……就職するし。

ということとせっかく書いたんだから小説家になろう  
うへ投稿することにしました。

たくさんの方の目に触れてもらえたら嬉しいです（\*、\*、\*）

twitterやってます。

ユーザー名はtakanashin|natorです。

更新情報や執筆状況などをつぶやいていきたいと思  
います。

他にも小ネタや裏話、他諸々をつぶやいていき  
たいです。

<http://twitter.com/takanashin|nator>

感想に評価、誤字脱字の報告などお待ちしております。

## プロローグ

世界は理不尽で満ちている。それは、どこの誰が言ったのだろうか……

その言葉を聞いた時はそんなことはない、世界は案外悪くないものだと思えた。家はごく一般的な家庭よりもちよつとだけ裕福で、父と母と兄との四人暮らし。それなりの年頃らしく学業に部活、恋に興味にと、ちよつと満足いかない時はあつても、充足した日々だった。

けど、世界は理不尽で満ちていると言つのはこの世界の真理なのだろう。

不幸は誰にでも突然襲い掛かるものだ。と、テレビで言っていたけど、それが自分の人生に当てはまるとは思わずに生きてきた。

ニユースキャスターが毎朝届ける不幸な出来事を尻目に学園へと登校するように、同じ日本での出来事もどこか遠い世界で起きることにのよつと感じていた。

身近な人が事故で亡くなるのも家族の手で殺されるのも、それが自分にもいつか訪れるかもしれないと全く思わなかったわけではなけれど、それでも、やっぱりそんないつかは訪れずこともなく、私は平々凡々に生きていくのだろうと思つていた。

それが壊れたのはいつだろう……

父が一番の親友だと思つていた人に騙され、全てに絶望し、楽に

なるためにと自殺した時から？ 母が全てに嘆き、得体のしれない宗教を心の拠り所に信奉し始めた時に？ それとも兄が全てに憤怒し、世間では許されない行為に走った時？ もしかしたら私が

……いや、どれも違う。きっと私が生まれる前からこの世界は理不尽で壊れていたのだろう。

それでも私はこの理不尽で壊れた世界から父や母、兄のように逃げたりすることも出来ずに、ただ自分に嘘を吐いて生きていく。

人から見ればそれも逃げていることになるのだろうけど……

くるり、くるり。

過去が回る。

「最悪な目覚めだわ……」

のっそりと体を起こした少女は、枕元に置いてあった携帯電話を開いて日付と時刻を確認する。

四月十五日の月曜日。時間は六時十五分。

いつも起きる時間よりいくらか早い目覚めに少女は目を細める。

「……ああ、そういえば今日であれから一年が経ったのね……通りで夢見が悪いはずだわ」

一年前の四月七日に少女

真崎空音が信じてもない神から、

要りもしない傍迷惑はためいわくな能力に目覚めさせられた日。

そして、それは……空音が嘘を吐き始めた日でもある。

「はあ……」

空音は携帯電話のアラーム機能を消してベッドから起き上がると、着ていた寝巻をベッドに投げ捨て、栗色の髪の毛を靡なびかせて浴室へと歩いて行った。

窓の外の天気は快晴。

それは空音の心情とは全く逆の空模様だった。

「ようこそ、神薙学園高等部へ。俺はお前が転入する二年A組の担任の来栖川だ。担当教科は生物。それからお前が入部する予定の能運部の顧問でもある。よろしく」

白衣を着た来栖川は手元の書類を眺めながら投げやりな態度で歓迎と自己紹介をする。

「能運部？」

真新しい制服を着た少年 上倉久遠は聞き慣れない単語に首を傾げる。

「ん？ 能力運用部に入部するのがこの学園に入る条件の一つだっただろ」

能力運用クラブ。略して能運部と呼ばれていることを理解した久遠は頭を頷かせる。

「ああ、はい。よろしくお願いします」

来栖川は手元の書類を机の上のバインダーに綴じると席を立った。

「ああ……これからA組のホームルームだから適当に自己紹介を考えておけ」

そして、スタスタと扉の方へと歩いていくので、久遠も後を付いていく。

校舎内はホームルーム前ということもあってどこか騒がしい。

階を一つ上がり、二年の教室がある三階に来る。神薙学園では廊下側一面が窓のようで教室内の生徒達からの視線が廊下を歩く久遠たちに注がれた。

若干の居心地悪さを感じた久遠はそれを紛らかすように、扉の上にあるプレートに視線を向けると、そこには二年F組とあるので、普段見慣れない生徒が教師と歩いているので珍しがっているのだろう。

久遠がそんなことを考えていると来栖川の足が止まった。視線を

扉の上のプレート向ければ二年A組の文字。どうやら碌ろくに自己紹介を考えないまま、教室に着いてしまったようだ。

教室内では教室の外に来栖川が来たことに気付いた生徒たちが慌てて席に着いているのが見える。

「それじゃ俺が合図をしたら教室に入ってこい」

来栖川はそう言うのと扉を開けて教室に入ってしまった。教室の外にいる久遠に視線を向けていた生徒も来栖川が教壇に立つと、そちらに意識を集中させる。

「突然だが、転入生だ」

前置きもなく投げやりな来栖川の言葉を合図に久遠は二年A組に足を踏み入れる。久遠が隣に来たのを確認すると再び来栖川が口を開く。

「あー今日からこのクラスの一員になる上倉だ。上倉、自己紹介」

「上倉久遠です。よろしくお願いします」

結局、何も考えていなかった久遠の自己紹介はとてもシンプルなものだった。だが、A組の生徒は拍手を持って久遠を迎えてくれた。「はい、ちよつといーですか？」

拍手が鳴り止んだ頃を見計らって、ピンクのリボンで髪をポニーテールにした可愛らしい女子が、小学生並に真っ直ぐ手を上げる。身長も小学生並のようだが……

「俺の授業でもそんなぐらいの挙手をしてもらいたいもんだな……で、何だ？ 百瀬」

「是非、我々に転入生の上倉くんへの質問タイムを！」

百瀬と呼ばれた女子は来栖川の嫌味を物ともせずには発言する。他の生徒は静かに状況を見守っているが、どうも百瀬同様、好奇心に満ちた顔をしているところを見ると大多数の生徒が質問をしたがつているようだ。

義務教育を終えた高校生にもなると転入生など殆どいない。そもそも神雑学園は初等部からのエスカレーター式だ。外部入学でしか新しい人間が入ってこないのだから、転入生が気になるのも仕方が



ないのかもしれない。

それがわかっていても一クラス三十人分の質問をされると思うと憂鬱ゆううつな気持ちになる久遠だった。出来ることなら質問タイムは無しにしてもらいたいところだが

「少しだけだぞ」

久遠の願い届かず、来栖川は窓際に置いてあったパイプ椅子に座った。教壇に一人残された久遠は嘆息たんそくをする。

「それじゃ廊下側から順番に名前と質問してけ」

来栖川の提案により、久遠は全員の名前を知る機会を得た代わりに面倒くさい質問攻めにあうことが決まった。廊下側の一番前に座っていた男子が席を立つ。

「出席番号五番、梅本和樹うめもと かずき。そうだな……それじゃ趣味は？」

「読書」

「関川深雪せきかわ みゆきです。上倉君の好きな食べ物は何？」

「蕎麦」

「葉山美羽はやま みほね、出席番号は十九番です。えっと……上倉君はどんな本を読むのかな？」

「本なら何でも読む」

その後も当たり障りのない質問が続く中で、先ほど手を上げた百瀬に順番が回ってきた。

「ふっふっふ……この時が来るのを待ちわびていたよ」

何やら芝居掛かった振る舞いで席を立った百瀬に久遠は嫌な予感しかしなかった。周りからは「いけーA組のパパッチ娘！」やら「いっっちゃえいっっちゃえ！」などと囃はやし立てられているのを見れば誰でもそう思うだろう。

「出席番号二十三番、百瀬桃花ももせ とうか！ 人呼んで神薙学園のパパッチ桃ちゃん！」

しかも、A組から神薙学園へとグレードアップした看板を背負ってきた。周りからは何故か拍手喝采。百瀬も「どうもどうもー」と手を振っている。

「そんな桃ちゃんか上倉くんに訊ねることは、ズバリ！ 現在、彼女はいますかっ？」

百瀬の質問にA組の女子は目を輝かせて久遠を見ている。男子からは若干のやつかむ視線が送られているが……

「いない」

久遠が投げやりに答えると女子からは短い悲鳴が上がり、男子からは「同志よ！」という野太い声が上がった。

「そっかー、上倉くんって結構イケメンなのに意外だなー」

百瀬は呟きながら、桃ちゃんのマル秘手帳！ と書かれた手帳に何やら書き込んでいる。

そこからは百瀬同様に少し踏み込んだ質問も増え、久遠は暗鬱あんうつとした表情でそれらに答えていった。そして、ようやく最後の一人に順番が回る。

「真崎空音。二十一番。……あなた、能力者でしょ？」

窓際の最後尾から一つ前に座っていた空音の質問はいやに断定的だった。周りの生徒も思わずどよめく。

「……」

空音の質問の真意を測りかねる久遠は初めて黙った。何故そんな質問を思いつき、あまつさえそんなデリケートな問題に触れられるのか、と。

「雄弁な沈黙をありがとう」

その沈黙から空音は答えを導き出し、席に着いた。沈黙の理由はどうあれ、結局は久遠が能力者なのは変わらない。

「真崎。それはアウトだ……」

今まで静かに見守っていた来栖川が面倒くさそうに口を開いて空音を諭す。

能力者は普通の人間には忌避きひされる存在だ。それは、能力者の持つ能力が大抵は超常的なものだったり常識外のものだったりするからだ。人間は自分と違うものを認めないし受け入れない。そして、それは差別や迫害へと至ることもある。

そんな世の中でも神籙学園は能力者への理解があり、積極的に能力者の受け入れをしている。久遠もだからこの学園へとやってきたのだ。

「上倉君、能力者なんだ……」と誰かがポツリと漏らす。受け入れをしていると言っても、実際は一般生徒との隔<sup>へだ</sup>たりがいくらあるのも現状である。

「ほら、質問タイムは終了だ。後は休み時間にも各自でやれ。ああ、それから一時間目の俺の授業は生物室でやるから移動な」

来栖川はパイプ椅子から立つとざわざわと騒ぐ生徒たちに言い放つ。

「それと真崎は俺のところに来い」

呼ばれた空音は移動教室の準備一式を手にして、周りが教科書やノートを慌てて準備している横を通り、来栖川の前に立つ。

「なんですか？」

他の生徒達も準備しながら、廊下の外から様子を伺っている。久遠も空音に多少の興味を持ち、改めてその容姿を見る。

窓から入る太陽光に腰まで伸びる綺麗な栗色がキラキラと輝いているように見える。染めているならば髪質が落ちて天然の潤いが無くなる。輝くように見えるということは栗色の髪は地毛ということだ。女子にしてはそれなりの長身と端正<sup>たんせい</sup>な顔立ちが相俟<sup>あいま</sup>って美人という言葉がよく似合いそうだ。

「真崎、次の俺の授業は出席扱いにしてやるから上倉に学園を案内してやれ」

「何で私がそんなことしなきゃいけないんですか」

「さっきの質問で上倉を案内してくれそうな奴が減ったからだ。能力者の話題<sup>わだい</sup>っていうのは、扱いが難しいんだから気を使えよ。お前も能力者<sup>おんなじ</sup>なんだからわかるだろ……」

面倒くさそうに喋りながら頭を掻<sup>か</sup>いている来栖川の発言を聞き、期せずして空音も同じ能力者だと知った久遠は、あんたも話題の扱いには気を付けろよ、と内心そう思うのだった。

「あ、なら先生！ 私も能力者おんなじ！ 私も上倉くんを案内しますよー」  
そこで、今まで来栖川と空音の会話に聞き耳を立てていた百瀬が目をキラキラさせて話に割り込んできた。

「お前はダメだ。真崎は成績優秀だからまだいいが、百瀬……一年の時の自分の評定を覚えているか？」

「うぐ……でも、新しく神薙にやってきた上倉君に空音ちゃんは荷が重すぎると桃ちゃんは思っているですよ！」

「ダメだ。お前は俺の有難い授業を受けるんだ。ほら、行くぞ」  
「そんな殺生な〜」

来栖川は百瀬を連れて教室を出て行った。他の生徒も慌てて二人の後を追って出て行ったので、教室には久遠と空音だけが残された。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9673y/>

---

過ちのライゼ

2011年11月29日01時54分発行